

勝本港の「みなと文化」

石井 敏夫

目 次

第1章 勝本港の整備と利用の沿革	107-1
1. 古代のくじら捕獲と漁法	107-1
2. 伝承による風本、勝本の地名の起こり	107-2
3. 近世、勝本港のくじら組	107-2
4. 朝鮮通信使の勝本寄港	107-3
5. 吉岐の押役所を勝本浦に設置	107-4
6. 江戸時代の勝本浦人口動向	107-5
7. 近代、現代	107-5
(1) 問屋時代	107-5
(2) 勝本浦の漁場、漁法の開発	107-6
(3) 大正時代（イワシ刺網漁）	107-7
8. 昭和、平成期	107-8
(1) 勝本港の整備	107-8
(2) 勝本港の漁業の変遷	107-8
第2章 「みなと文化」の要素別概要	107-11
1. 本土より流入した「みなと文化」	107-11
(1) 遊里	107-11
(2) 言語（方言）	107-11
(3) 囃子打ち込み	107-11
(4) 金比羅神社信仰	107-12
2. 伝承により育った「みなと文化」	107-12
(1) 百々手講	107-12
(2) 御幸船（みいくね）	107-13
3. 地元で育った「みなと文化」	107-13
(1) 朝市	107-13
(2) 聖母宮祭り	107-13
(3) 港祭り	107-14
(4) ペーロン大会、花火大会	107-14
(5) 信仰供養	107-15
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き	107-17
1. 勝本浦まちなみ景観保存	107-17
2. まちづくり景観資産の保存、活用	107-17
3. 河合曾良の墓、観光宣伝	107-18
4. 御仮殿のお潮汲み	107-18

所在地：長崎港壱岐市	港の種類：港湾	港格：地方港湾
------------	---------	---------



【位置図】



【現況写真】(長崎県土木部港湾課)

第1章 勝本港の整備と利用の沿革

1. 古代のくじら捕獲と漁法

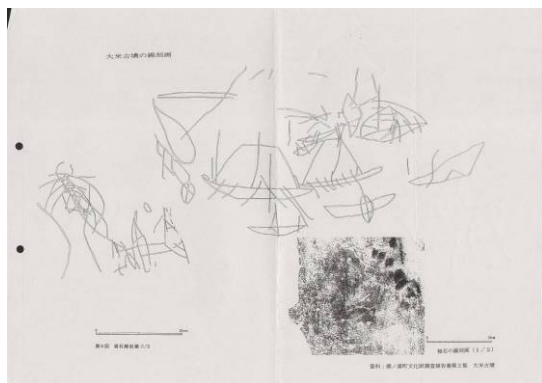
弥生時代の原の辻遺跡、カラカミ遺跡より、当時の漁具の一部が発掘された。くじらの骨などを利用した「銛」や「あわびおこし」、また石製の釣り糸の「重り」が出土している。

古墳時代に入ると、7世紀の古墳とされる鬼屋窪古墳、大米古墳からは内部の壁画より舟団で出漁し、くじらに銛を突き立てている捕鯨の様子を描いた線刻画が出ている。

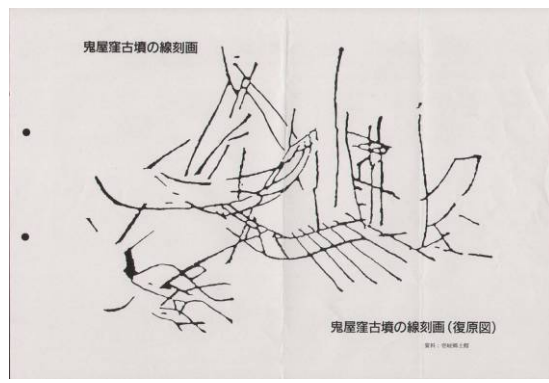
金属器の発達してきたこの時代には、すでに漁業の共同集団が出来て、壱岐周辺にくじらの回遊する時期には、速度の遅い親子くじら、迷いくじら等を狙って、海岸の入り江に追い込み捕獲していたのではないかとと思われる。

古墳の線刻画の舟も予想以上に大型外洋舟で、8本の櫂が描かれ、帆柱に帆を揚げて航海していた舟を使用したものと考えられる。

中国の「魏志倭人伝」(297)には、「壱岐島には3千ばかりの家があるが、食するには足らず、南北に交易していた」と記されている。壱岐は小さい島ながら約1万人の人口がいたことになり、大陸文化が運ばれた街道だけに、大陸と日本との架け橋として海洋文化も進んでいたものと考えられる。



【大米古墳の線刻画】



【鬼屋窪古墳の捕鯨線刻画】

2. 伝承による風本、勝本の地名の起こり

一般的に風本ならびに勝本の地名の起こりとして知られていることは、神宮皇后の説話では、約4世紀から5世紀頃、朝鮮の三韓に兵を進められた折、この地に立ち寄り風待ちをされた時、神社に祈願をし朝鮮に渡るに都合のよい風が吹いた、皇后はおよろこびになって、この地を「風本」と名付けられたといわれている。

その後、三韓を征伐され戦いに勝って帰られる際も、この地に寄られて風本の名を「勝本」に改められた。それ以来、この地は勝本という地名になったと伝えられている。

3. 近世、勝本港のくじら組

壱岐の近海は、初冬にはオホーツク海から日本海を通過して南下する「下り鯨」と、早春になると北上する「上り鯨」で賑わった。

「うちかすむ壱岐のわたりを見渡せば、鯨の息吹たたぬ日なし」と古い歌にも詠われているように、壱岐周辺はくじらの大群が通過する通路であった。

その中で、冬の漁期も春の漁期も捕獲に都合の良い場所は勝本浦（田ノ浦）と前目浦（恵美須浦）であったといわれている。

最初は、紀州の熊野浦より明応2年（1493）日高吉弥が恵美須浦にきて突組による捕鯨を始めている。寛永元年（1624）には、大村の深沢義太夫がきて捕鯨業を開始し、壱岐周辺から銚子を投げて突き刺す突組で、連日くじらがとれて多大の利益をあげた。

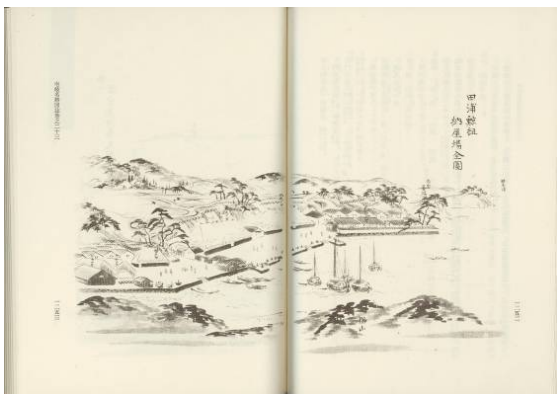
その後、壱岐島内の各地にも捕鯨基地が増し、延宝2年（1674）には14箇所となり、突組も17組で競い合ったそうである。

貞享元年（1684）には、2代目深沢義太夫は和歌山県太地浦へ行って網組の漁法を学び、帰国すると壱岐の勝本浦で九州で初めて網組を開始したといわれている。

網組による捕獲が始まると、突組時代のようにくじらに逃げられることも少なくなり、漁獲頭数は増加した。しかし、大規模な組織が必要となってきた。

当時（1663）壱岐は、平戸藩主松浦鎮信の統率下で、漁業については、百姓は断りなく漁船に乗ることは禁じられていた。ただし、耕作を済ませ年貢をおさめて暇が出来たときは、その村の代官より許可札をもらって漁に出かけてもよいとの法律であった。

また、元禄元年（1688）には運上銀（くじら組の営業に課した税金）を改正し、従来1頭につき銀15枚を10枚とし、網組は30頭まで銀1貫目、31頭以上は銀30枚ときめた。



【勝本田ノ浦捕鯨基地全景】



【田ノ浦くじら解体作業】

享保 16 年（1731）には、平戸藩は莫大な利益を生む捕鯨に運上銀を徴収するため、勘定奉行の下に壱岐国鯨組方目付役をおき徴収にあたらせていた。

土肥くじら組の全盛期は 18 世紀で、土肥組田ノ浦納屋場の組織記録によれば、勢子舟（刃刺を乗船）24 隻、双海舟（網を積んだ舟）12 隻、双海付舟（双海舟が網を張るときに手伝う舟）12 隻、持双舟（鯨を運ぶ舟）8 隻、納屋舟 2 隻、合計 58 隻を所有していた。

この鯨舟乗組員は刃刺 51 名、加子（水夫）は 672 名で合計 725 名となり、陸上の納屋場で働く者 135 名にて全員で 858 名になるが、これに臨時雇用を加えると実に千人を超える人々が土肥組で働いていたことになる。

4 代目土肥市兵衛は、勝本港以外にも対馬、唐津と基地を拡げ、一年間の捕獲頭数は 200 頭を超えて「鯨王」といわれ、「鴻ノ池」「三井」と共に日本の三大富豪と言われるまでになっていた。

この時代に、勝本浦黒瀬海岸の「つたや旅館」より観音堂に至る埋め立ては、土肥組によって町づくりが行なわれ、本邸が構えられたと言われている。また、坂口町の石橋邸付近も土肥組によって埋築建造され、明和 4 年（1767）には本浦を開拓し、来客接待の豪華な御茶屋屋敷邸宅を構えている。このように、土肥組により田ノ浦、本浦、坂口、黒瀬と勝本港の埋立工事を行なわれている。

4. 朝鮮通信使の勝本寄港

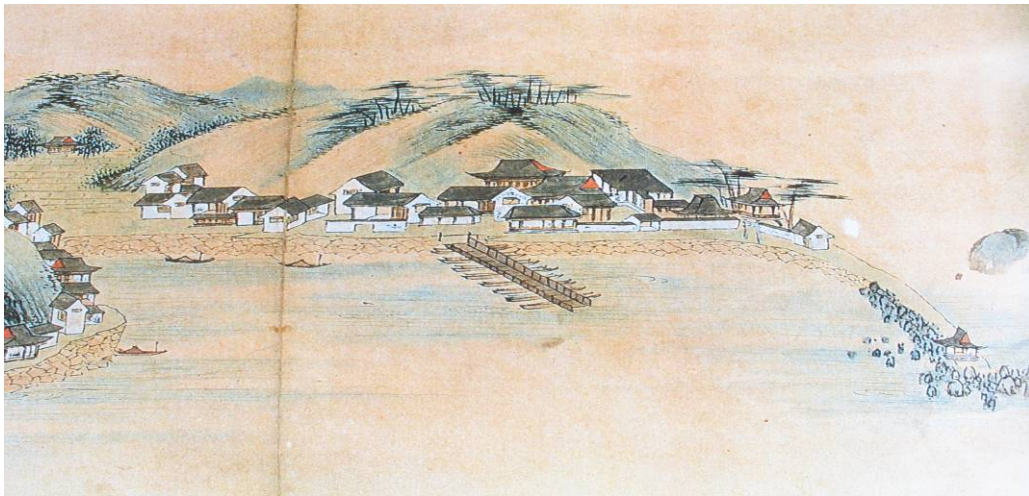
朝鮮通信使とは、朝鮮王朝が江戸幕府に派遣した外交使節団で、江戸幕府の将軍が交代したときに慶賀のために日本に来ている。江戸幕府は、朝鮮通信使を国賓として将軍一世一代の来朝だけに、出費をいとわず丁重に接待している。

慶長 12 年（1607）から文化 8 年（1811）までの約 200 年間に、12 回程日本へ来ている。その間、勝本港には往路 11 回、帰路 8 回入港している。

朝鮮通信使一行は平均 450 名であり、これに対馬の宗家より護衛、案内役として約 800 名が同行し勝本港に入港している。

その時の食料だけでも、一日で米 50 石、タマゴ 15,000 個、山芋 1,500 本、あわび 2,000 貫、するめ 5,000 斤、酒 15 石という大変なもので、その経費は平戸藩の負担とはいえ地元住民の負担増加にもつながるので、一日も早く順風が吹いて勝本港から出て行くように神社に祈願したそうである。

当時は、勝本港の正村湾は浅く本船は係船できないので、和船に乗り換え受け入れた。正村湾では、和船を 8 隻連ねて陸橋を作り、その上に板を設け左右を打欄として敷物を敷き迎え入れたとある。



【第 10 回朝鮮通信使(1748 年)の画家「季聖麟」による正村湾のスケッチ】

5. 壱岐の押役所を勝本浦に設置

松浦藩主は、大陸および朝鮮に対する壱岐島警備のため、勝本坂本触に延宝 8 年 (1680) 壱岐で一箇所、勝本に押役所を設置した。現在の警察署、裁判所、役場等を兼ねて行政を行なった役所である

当初は 21 名の武士が常駐し、また若宮島には遠見番所と称して 32 名が配置されていた。それだけに松浦藩が壱岐北部の勝本を重視していたことが伺える。

宝暦 10 年 (1713) には、壱岐武具方帳定格が定められ、延べ 200 名に増員され、壱岐の陸海の警備は厳重を極めたとある。

この押役所は明治 2 年まで約 190 年間置かれていた。その間には、安永 6 年 (1777)、南京船の勝本入港で騒然とした。その後も嘉永 2 年 (1849) からは異国船が度々現れるや、全島騒然として警備に着き、安政 5 年 (1858) には出動命令が発せられ、警護の増強に松浦藩より来島している。

勝本押役所には教練場もあって、中尾丹弥の指導のもとに稽古場において軍事訓練を受けていた。



【勝本押役所跡の門】

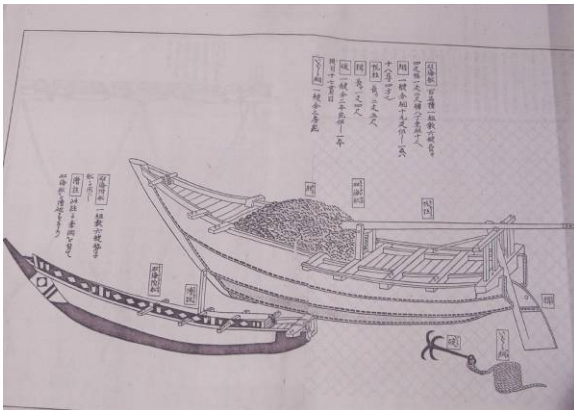
6. 江戸時代の勝本浦人口動向

勝本浦の有人家について、海槎録には、慶長12年(1607)一支島風本浦有人家40~50戸と記してある。元和3年(1617)の「東槎上目録」には、風本浦辺居民僅か40~50戸と記してあり変化はない。承応3年(1654)の「扶桑録上」には風本浦縁岸人家70~80戸とあり、宝暦13年(1763)朝鮮通信使の日記には、浦民家百余と記録されている。これは現在の正村区のみについて記しているのではと、郷土史家の山口麻太郎氏は述べているが、いずれにせよ当時は貧寒なる一漁村であったことが想定される。

沓岐国続風土記によると、寛保2年(1742)には民居233戸、船66隻と記してある。寛政10年(1798)は家数274軒、船数67隻(大船10隻、小船10隻、伝通23隻、伝間24隻)で船の増加は全くない。

その後、勝本浦の発展模様は沓岐名勝図誌に、文久元年(1861)に民戸419戸、船77隻(商船17隻、伝通舟60隻)と、この119年間に民戸は186戸増加し約2倍となっているのに、船はわずか11隻の増加であると述べられている。これは当時くじら組の全盛時代で、「一度乗りたや千石船に、船は勝本土肥の船」とまで詠われていた時だけに、土肥組に雇用された方が有利であったのであろう。

また、この時代に勝本浦の鹿ノ下に対馬藩の宗氏が建てた屋敷があった。対馬藩が本土往復のときの連絡機関や休憩場所として使ったのである。広さは355坪で、元和元年(1681)には沓州屋敷番と呼ばれた人々が64人常駐していたと記録にある。



【くじら組の勢子船と双海船画】



【くじら組の勢子船(八丁櫓)模型】

7. 近代、現代

(1) 問屋時代

勝本浦は、江戸時代のくじら組を主体として栄えてきた漁村であった。明治以前は備中船が塩を運んで来て、その帰りに残りの塩で「ぶり」等を塩漬けにして持ち帰ったといわれている。

この当時から、松浦藩によって与えられた株を持つ「元方」、「親方」と呼ばれる問屋9軒があった。彼らは問屋株を独占し、漁民に絶大な支配力を持っていた。その後、最盛期には13軒になり「13軒株」と呼ばれた。

明治時代になると、勝本浦に3軒の大型船ができ、この船は備中まで魚を売りに行き、その帰りに塩を積んで帰っていた。明治から大正期にかけては「問屋時代」と呼ばれるよ

うに、問屋が非常に栄えた時代である。

問屋は漁師が持って来た魚を買い上げるのではなく、魚を受け取って漁師に適当なだけ金を与えるという「アテガイブチ」であった。後には漁師と問屋との間に売買の方法が確立されたが、その関係は売り手と買い手の関係でなく親方と子方の関係であった。

その後、10日間単位で値立てが行なわれるようになり、問屋と漁民代表の「値立世話人」で値決めが行なわれる。ところが値が決められても、次の10日間に福岡市場の売値が下がると、問屋は値立で決めた値より下げた。反面、市場で高く売れても値立の値より高く上げてくれることはなかった。

また、問屋は4丁櫓の和船で7～8時間かけて福岡魚市場に出荷するのだが、相場の変動も激しく博打のようなものであったという。その関係で、問屋は別に漁師から口銭（手数料）として5%を取り、大変な利益を上げたといわれている。ただし、この口銭から2%は聖母神社祭典の際の狂言費（芝居祭典費）として拠出されていた。

（2）勝本浦の漁場、漁法の開発

勝本浦の零細な沿岸漁業を開拓し、現在の漁業の基礎を築きあげたのは「中上長平翁（1840－1909）」である。

当時、勝本漁民は沿岸漁業だけに依存して、旧法による漁労を営むに止まっていた。中上翁は人一倍研究熱心な人で、勝本沖合いのぶり、たい、いか等の新漁場発見をなし、漁具や漁法を發明し広く漁民に指導啓蒙され、勝本の漁業を大きく飛躍させ、地元では「漁の神様」として尊敬された人である。

明治3年には、ぶり延縄は夜明けを待って漁具を海に投入し漁獲するのが常例であったが、中上翁は夜明け後に漁具を投じても有効であることを実験し証明された。以来ぶり延縄漁業は勝本浦漁民に多大の漁獲増加をもたらした。その他マグロ流網も考案している。

明治6年には、対馬の銘村海岸でサバ漁業を成功させ、銘村発展もこのサバ漁業の開発に基くものであると言われている。

また最大の功績は、数年かけて研究を重ねた「羽魚網」の完成であった。当初は巨額の資本を必要とし、いまだ経験のない漁法だけに家族もこの冒険には同意せず、他の漁民たちの協力を得るために走り回った。その熱意により数名の協力者が出て、明治35年より操業開始して予想外の好成績を挙げることができた。対馬、熊本、大分の漁船にも指導啓蒙し、水産業に貢献された。その功績を讃え、城山公園に大きな「中上長平翁」の記念碑が建立されている。

盛量期には、勝本塩谷湾の10隻位を除いて、ほとんどが漁民ではない有産階級の人達が網元で、地元船25隻、山口県三見船23隻が勝本港を基地として競いあっていた。

乗組員は、一隻に9名前後が乗り組み、町外や農家の人々が多く、中には郡外からも働きにきていた。漁場は七里ヶ曾根から沖ノ島海区で行なわれ、昭和7年（1932）には一日で65本の漁獲をした船もあり勝本港は賑わったようだ。だが、昭和15年には終わりを告げている。



【明治時代の羽魚網大漁絵馬】



【昭和初期のモーター船羽魚網絵馬】

(3) 大正時代（イワシ刺網漁）

明時末期より流行したイワシ刺網は相当の水揚げがあり、盛漁期は大正の末期であった。勝本浦の操業隻数は 30 隻で、主として羽魚網業者であったが、その他 5 隻位が操業していた。乗組員のうち純漁民は少なく、東部の農家や町外の人達がほとんどであった。

漁船は羽魚網船が併用され、時期は 1 月より 4 月頃まで、遠くは北朝鮮沖合いに行く船もいたが、ほとんどが壱岐周辺で操業していた。冬の西風が強い時は勝本港への入港が困難で、瀬戸浦港、芦辺港、渡良港などに寄港して操業していた。

魚網は一隻あたり 20 反が敷き網され、一反の長さは 20 尋 (30m)、深さ 2 尋 (3m) で、大漁の時は約 1 万 5,000 斤 (2,500kg) の水揚げも珍しくなかった。イワシが網にかかりすぎて網が沈み、網を捨てて寄港することも年間に何度かあった。

水揚げイワシの販売は約 10% が食用で、残り 90% は加工業者に渡し、釜で炊いて油をとり、シメカすは肥料にされ、イワシ油は食用油として出荷されていた。しかし、イワシは回遊変動があり良い年は長くは続かず、昭和 6 年より不漁と戦時下に入り、人手不足と資材不足となり、昭和 15 年頃でイワシ網漁業は中断された。

その後、昭和 27 年より魚群探知機が出現し、壱岐の漁場もイワシで賑わったが、昭和 35 年頃には全く不漁となり姿を消した。



【大正 9 年イワシ刺網操業絵馬】



【大正初期、田ノ浦イワシ加工場】

8. 昭和、平成期

(1) 勝本港の整備

勝本港への汽船の入港は、明治 27 年に深川汽船の若津丸（170 トン）が博多―勝本間に就航したのが最初である。以来、明治 36 年に天陽丸（150 トン）、明治 39 年には浦戸丸と寄港しているが、当時は欠航が多く 2 週間も本土との交通が途絶えることもあったという。

汽船がある程度安定して勝本航路が確立したのは、大正 9 年の対馬丸に続いて大正 12 年睦丸（520 トン）が就航してからであった。当時は勝本港に接岸施設もないので、汽船は港の中央に係留して、はしけ（団平船）に中継されて本船に乗降していた。

この汽船の接岸岸壁建設は昭和 11 年から計画されたが、自己資金が集まらず戦争の影響もあって、完成したのは戦後の昭和 24 年 12 月であった。

勝本港の港湾事業としては、昭和 8 年に鵜ノ瀬防波堤が完成している、また海岸の埋め立て工事としては、昭和 11 年に湯田町に製氷所用地として約 400 坪が造成されている。

その後は、第二次大戦の影響及び戦後の混乱で公共事業は長期間中断されていた。

昭和 30 年代までの勝本港漁船係船状況は、東部地区の漁船は海岸が遠浅のため、約 20 m くらい沖に投錨し伝馬舟で乗り降りし、西部地区では浜通り側の家裏には棚が連なり、漁船が係船し直接乗り降りしていた。

時代の流れでバス、自動車の普及で、勝本港の黒瀬―赤滝までの海岸通りが昭和 39 年に完成し、この事業を契機に勝本港湾工事は進み、海岸通り、防波堤工事、急傾斜対策工事、港湾浚渫工事、中央突堤工事、外港工事と港湾工事が促進され現在に至っている。

その間、漁船の増加ピーク時は昭和 50 年前後で、勝本港は 500 隻以上の漁船がひしめき係船場不足が続いて、正村湾内では二重係船も余儀なくされていた。また、台風時は北風、西風を避けるため正村湾に集中係船していた。

しかし、平成時代に入り漁獲減少、若者の島外進出で漁船も約 400 隻前後となり、係船場は落ち着きを取り戻している。



【昭和 30 年頃の漁船投錨係船風景】



【昭和 40 年頃西部地区棚係船場】

(2) 勝本港の漁業の変遷

① ぶり飼付漁業

昭和 5 年より始まった「ぶり飼付漁業」は、鹿児島県の漁船によって地元へ伝えられたもので、漁場に多量の餌（いわし）を撒き「ぶり」を誘い集め、それを 1 本釣漁法で集約的に釣り上げる漁法である。これには多額の資金と動力（人力）を必要とするが、必ず成

功するとは限らない漁法である。

昭和の初期は、漁民でない資本家によって組織され好成績をあげていた。しかし、漁業者の1本釣漁場と同じ七里ヶ曾根の漁場にて反対の漁民運動が起こり、純漁業者(261名)で組織する「勝本ぶり飼付組合」が結成され、昭和5年より操業が開始された。その結果、大漁に沸き勝本浦に好景気をもたらした。

しかし、昭和16年になると第二次戦争の影響もあり、人手不足と撒餌となるいわしの不足で中止のやむなきに至っている。

その後、戦後において対馬の佐須奈、小茂田の漁場でぶり飼付漁業が再開され、好成績を収めている情報で、勝本漁協でも昭和26年より再開したが、成績が不振で昭和28年度には中止された。

②スルメイカ漁業

その後は、ぶり、いか、たいを主体とした零細一本釣漁業が行なわれてきたが、昭和37年頃よりスルメイカが豊漁となり、価格も非常に高値で好景気が訪れる。漁船も大型化しその隻数も増加してきた。全国の沿岸漁業が不振のなかにあつて、当地は周囲の好漁場に恵まれ、組合員が一致団結して「あぐり網」、「底引き網」等の大資本網漁業を阻止し、乱獲防止し、漁場保全に努めた経緯もある。

漁協の漁船建造近代化資金の貸付も利用され、零細な一本釣漁業も時代の進展に伴い、漁船も特殊船(19トン型)約40隻は、日本海の大和堆漁場から北海道沖合いまでスルメイカを追って約6ヶ月前後は出漁するようになった。また、中型船(5トン~10トン)は壱岐周辺沖合いで漁獲したスルメイカを、漁場より直接、福岡魚市場、下関魚市場へ水揚げするようになった。

しかし、最近ではケンサキイカ、スルメイカ等の漁獲減少と燃油高騰で、消費地市場に直行する漁船は、ほとんどいなくなった。



【勝本港中型船の係船場(手前側)】



【勝本港特殊船(19t)係船場】

③イルカ捕獲騒動

イルカが壱岐海区で急増し、漁業被害が続発したのは昭和40年頃からである。当時イルカの生態調査が行なわれ、その結果2月~3月にかけて壱岐近海には30万頭のイルカが回遊していると発表された。

イルカの被害というのは、漁船が操業している漁場にイルカが回遊して来ると魚群は逃げてしまい、釣り上げ途中の魚は横取りされ、漁具は傷められ、イルカが漁場に滞在して

いる間は漁獲ゼロの毎日が続く。

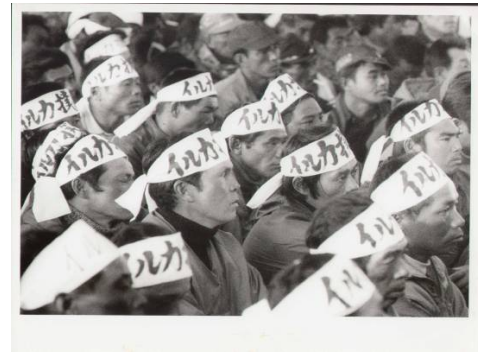
そこで漁業者は団結して、イルカが多量に勝本近海に近づいた時には、約 500 隻の漁船が操業中止して円陣を幾重にも描き、船腹に取り付けた鉄筒の発音器をハンマーで叩きながら、海岸に追い込む捕獲作戦を行なうが、当初は途中で逃げられて失敗の連続であった。その後、水中花火が考案されイルカの群れの一部を追い込むことに成功した。

昭和 53 年 1 回で約 1,000 頭のイルカを追い込んだ時、動物愛護団体の外国人がきてイルカ囲い網を切断し、一部のイルカを逃がした事件もあった。

現在では、極少量のイルカが現れる程度で、あれ程いたイルカが何処で回遊しているのか七不思議の現象である。



【昭和 53 年イルカ大量捕獲風景】



【昭和 53 年吉岐対馬漁民決起大会】

④マグロー本釣漁業

昭和 50 年代までは、ぶりの夜釣漁業で賑わっていたが、イワシの回遊減少または温暖化影響によるものか、ぶりの漁獲が減少してきている。

それに代わって大型マグロの漁獲が始まった。以前から勝本沖合いをマグロが通過していたことは知られていたものの、漁獲方法がわからず見過ごされていた。

平成 15 年頃より、漁法を島外者より指導を受け 100 キロ級の大型マグロも漁獲できるようになった。現在(平成 20 年)では中型船を中心に 50 隻位が盛漁期には操業している。

また、温暖化で海水温度が上昇しているのか、南方のマンボウ等が回遊してきている。



【大型マグロ 349kg(内蔵抜き)】



【平成 20 年 2 月、赤マンボウ(41kg)】

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 本土より流入した「みなと文化」

(1) 遊里

土肥くじら組は4代目市兵衛のとき、明和4年（1767）勝本の本浦を開拓して、接客用の二階建て大豪邸の「お茶屋」屋敷を建てた。

広い土地に、南側には高さ7m、長さ90mの大石垣（アホ一塀）で囲み、西側玄関には大門、中門を設け左右には番所を建て、室内は金銀で散りばめた九州では見られない豪華な建物であった。

市兵衛は巨額の財貨を投じて、京都大阪地方より数多くの美女を雇い入れ、本館内に住ませ来客の接待に務め人目を驚かせた。当時、市兵衛はくじらを大阪京都方面にも出荷販売していたので、多くの関西文化を取り入れている。

(2) 言語（方言）

多くの京都美人（10数名とも言われている）が、勝本に定住していた。また、捕鯨の刃刺の若者は、紀州熊野方面より約50名位雇い入れていた。天保2年（1841）には原田鯨組にくじらを求めて来た舟は、播州、淡路、道ノ尾、呉、讃岐、今治、隠岐、浜田と30余隻が入港し、人的な交流が盛んであった。その他、大正時代になると山口県三見船の羽魚船（約20隻）も入港している。

したがって、各地の言葉が残り、壱岐の方言の中でも勝本浦だけは勝本弁として別扱いで方言集も出来ている。



【明治末頃のお茶屋屋敷前で運動会】



【巨大な大石垣（地元ではアホ一塀という）】

(3) 囃子打ち込み

聖母宮の例祭にお伴する「勝本はやし」は駕籠囃子である。

明和年間（1764～1772）に、聖母宮と印にゃく神社の祭礼に京都風の囃子を奉納したと言われている。たぶんお茶屋屋敷の芸者による指導であっただろう。現在は独身女性数名の太鼓、鐘、鼓と笛、三味線の和楽の演奏で古風な奥ゆかしい感じの曲で、毎年10月10日より祭りの期間は行なわれている。



【囃子駕籠にて打ち込み廻り】



【個人宅にて囃子の打ち込み】

（４）金比羅神社信仰

明治後半から大正時代にかけて、羽魚網、いわし網漁業が盛んになる。当時、浜裏で「漁師なら一度は讃岐の金比羅神社へ参拝しなければ男じゃない」と言われていた程で、閑漁期には船主、家族、乗組員の 10 名位が乗り込み、船泊まりしながら四国の金比羅神社に参拝していた。

地元でも昭和 30 年代までは、勝本浦全漁船の半数は金比羅丸であった。また金比羅神社が祀ってある町名は、讃岐の琴平にあやかって琴平町とばれている。

2. 伝承により育った「みなと文化」

（１）百々手講

百々手講は勝本浦に数箇所残っており、新年早々に行なわれる行事である。鬼の的を作り矢で射ることから百々手講と呼ばれている。

昔は 108 本も矢を射るところもあったそうである。地元では町内単位（10～30 軒）で行い、宿元は毎年順番制で廻る。神事は宮司を招き、的の周囲に 3 頭の鬼の字を書き、その的の中心を射ると 3 頭の鬼が撃たれて逃げる想定で、魔除け、厄払いの意義を持つものである。この百々手講は、いつ頃から始まったかは定かではないが、新町の面付帳では文政 8 年（1825）からの宿元帳がある。



【百々手講で鬼の的を射る神事】



【玄関に飾られた鬼の魔除け的】

（２）御幸船（みいくね）

神功皇后の朝鮮征伐で戦勝され、その帰りに勝本に立ち寄られる時、御幸船 2 隻で港の入口でお迎えしたと言う伝承もあるが、寛文 5 年（1655）に神幸祭が行なわれたことを考えると、この頃から御幸船は勝本で始まったのではと言われる。

行事としては、その年に新船を作った船主が東部と西部に分かれ、一の船、二の船で競い合う。昭和 30 年頃まで、船主は御幸船の船主の家に 1 ヶ月位合宿して寝食を伴にし、10 月 14 日の聖母宮祭典行事として行なわれる。

一の船が勝てば豊作、二の船が勝てば大漁とされる。現在も多少は簡素化された、が伝統行事として継続されている。



【御幸船出発点の竹竿囃し立て番】



【赤白 2 隻による御幸船競争】

3. 地元で育った「みなと文化」

（１）朝市

勝本浦の朝市は、江戸時代のくじら組が始まった頃からと言われ、壱岐島では他町にない勝本だけの珍しい朝市である。

田舎の人は、以前は農作物を担いで人家の密集する商店街の店先路上で販売する。帰りには魚類と物々交換し、その他生活必需品を買って帰っている。

漁家も小魚は自分で処分し加工もするので、人の集まる朝市に持って行った。以前、田舎の人は売れ残ると、町中を六尺棒でかごを担いで売って回る人も多かった。最近は黒瀬商店街の一定の路上場所を占拠して朝市も定着している。

朝市は、毎朝 7 時過ぎ頃から 11 時頃まで賑わっている。

（２）聖母宮祭り

聖母宮祭りの三大行事は、昔より船競争、奉納芝居、祭り囃子とされてきたが、今日では奉納芝居は影を消してカラオケ大会、仮装行列として花を添えている。

例祭は、10 月 10 日の御神幸の神楽で始まり、海で働く漁民のさらなる大漁と海上安全を記念して、御神輿を 2 隻の漁船に載せて勝本港内を右回り 3 回して串山海岸より上がり、対岸の御仮所へ 4 日間安置される。

10 月 14 日が本番で、御幸船 2 隻の競争による勝敗で先頭の御神輿が決まり町内を巡る。

御神輿のお伴には、祭囃子、仮装行列と続き、夜は聖母宮で、昭和 62 年に国の文化財

に指定されている壱岐神楽奉納で締めくくられる。



【勝本浦の朝市風景】



【聖母宮祭典御輿行列】

(3) 港祭り

勝本浦の海岸道路は昭和 34 年に着工され、昭和 39 年に完成した。これを記念して勝本港の尚一層の活性化のために、従来は勝本漁協が全船沖止めして、海上安全と大漁祈願する日として魚祭り諸行事が行なわれていた。その魚祭りの名称を変えて、漁民だけでなく勝本浦全体の港祭りとして、昭和 40 年 10 月 15 日より開始される。

主催は勝本浦連合公民館とし、午前中に全漁船がフライ旗を満艦飾にして、勝本港内を軍艦マーチで勇壮な漁船パレードを行なう。午後からは小学生の鼓笛隊を先頭に、町中の各職場団体数チームが趣向をこらして仮装行列に参加する。

現在は、漁船が大型高速化しているのので、事故防止のため毎年 100 隻程度が勇壮なパレードを行なっている。



【勝本港の港祭り(1)】



【勝本港の港祭り(2)】

(4) ペーロン大会、花火大会

ペーロン大会は、大正 4 年に敬老会の余興として開催された。その後、戦時中は一時中止されたが、戦後はお盆行事として 8 月 16 日に行なわれ、勝本浦公民館 12 チームがトーナメントで優勝を競う行事である。

公民館単位だけに、海岸に張られた天幕内は酒の勢いもあり、応援合戦で賑やかである。

勝っても負けても夢中になる一時で、公民館の親睦が深まっていく。

また、夜は花火大会で昭和 53 年より浦部商工会青年部、漁業青年部の主催で勝本浦活性化のため行なわれ、現在は壱岐市では最も華やかな行事として定着し、車での見物客も多く空き地は埋め尽くすほどの見物人である。しばしの間、花火の煙霧に酔う一時間半の夜空の祭典である。



【勝本ペーロン大会】



【夜空の祭典、花火大会】

(5) 信仰供養

①長四郎さん石碑

天保時代に松浦藩城代家老の行列が本浦を通っていた、人々は道の傍に土下座して行列の通過をじっと待っていた。そこに釣り竿を担いだ 7 歳の童子が、行列を横切ってはならない事の分別が分からぬままに、その先端を横切ったのである。年輩の武士は見てみぬ振りをしていたが、若い武士は追いかけて、瀬の上に逃げてうずくまっている童子を、無残にも首を斬り殺した。

地元の人達は不憫に思い供養塔を建立してその霊を慰め、近年まで毎年子供相撲が行なわれていたが、現在は中止になっている。しかし毎朝お茶をあげにおばあさん達が訪れ、供養が続けられている。

②魚供養、無縁供養

勝本漁協では、魚の霊を供養するため 8 月 17 日に漁協荷捌所で祭壇を設けて、漁協の沖世話人によって、地元で水揚げされる魚の模型を飾り多くの関係者を招き、僧侶多数による歎仏供養が盛大に行なわれる。また、辰ノ島のイルカ供養碑にも、島に渡って供養が毎年行なわれている。

無縁供養は、海難事故等で遭難、漂着、埋葬された住所不在の霊を慰めるため 8 月 17 日に、東部、西部の信者講によって何ヶ所にも分かれて、明治時代から伝統的に続けられている。

漁業者は「板子一枚下は地獄」といわれる場所で仕事をしている関係か、信仰については陸上の従事者より、はるかに信仰心が高い。



【長四郎さん供養碑】



【勝本漁協さかな供養行事】

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

1. 勝本浦まちなみ景観保存

勝本浦には多くの歴史遺産がある、神功皇后の馬蹄石、聖母宮、蒙古襲来地、勝本城跡、勝本押役所跡地、対馬屋敷の堀、曾良の墓、アホー堀、土肥鯨組跡地、酒造家等がある。

勝本浦のまちなみは、江戸―昭和戦後に建てられた1.5kmの漁村のまちなみである。奥行き長い短冊形の敷地に、切り妻平入りの町家が軒を接して立ち並ぶ漁村集落を基本として発展してきた。

幸いにして、平成20年4月より勝本浦の歴史を活かした街なみ景観を整備、保存するための「勝本浦地域街なみ環境整備事業」が始まった。この事業は10年間継続実施されるので、大いに期待されている。



【街なみ景観整備による散策休憩所】



【短冊形敷地の漁家密集地】

2. まちづくり景観資産の保存、活用

勝本浦では、平成16年に長崎県美しいまちづくり景観資産として旧松本薬局が、平成19年には藤嶋家住宅が認定されている。

前項の街なみ環境整備事業の促進と合わせて、平成20年には、藤嶋家の古風さを活かしたレストランが開店され、地元にとっては明るいニュースになっている。

また、松本薬局も長期間不在で遊休建物となっているが、明治末に建造されたレンガ造りの耐火建造物だけに、地元の歴史資料展示館等の再利用を期待したいものである。



【藤嶋家の改造＝古風レストラン開店】



【松本邸＝和洋風レンガ耐火建造物】

3. 河合曾良の墓、観光宣伝

松尾芭蕉と共に、1689年「奥の細道」紀行に俳句行脚した河合曾良は、芭蕉没後に徳川幕府の巡見使の随員として1710年当地を訪れ、勝本浦の海産物問屋「中藤家」で病気のため客死されたと伝えられている。

その後、曾良の生誕地諏訪市と俳句を通じて、平成6年に友好都市として提携し、平成10年に諏訪大社の「御柱」を譲り受け、現在2本目の柱が城山公園に建立されている。

平成11年5月22日が、曾良没後300年の節目を迎えるので、これを契機に観光宣伝にも期待が寄せられている。

4. 御仮殿のお潮汲み

毎年10月10日より、本浦の御仮殿に聖母祭り本番の10月14日まで、御神輿が安置される。その間、御仮殿前の海岸の海水汲みが、各家の行事として行なわれる。

この海水で自宅の玄関を清め、祭り当日は御神輿の通り道を清めるという儀式である。最近では海水汲みの木桶が古くなり、補給品が手に入らないので中止した人が多く、信仰厚い数名の人達により厳かに行なわれている。

この奥ゆかしい儀式は、桶を求めることにより再開出来そうである。筆者も地元の一人として復活に努めて見たい。